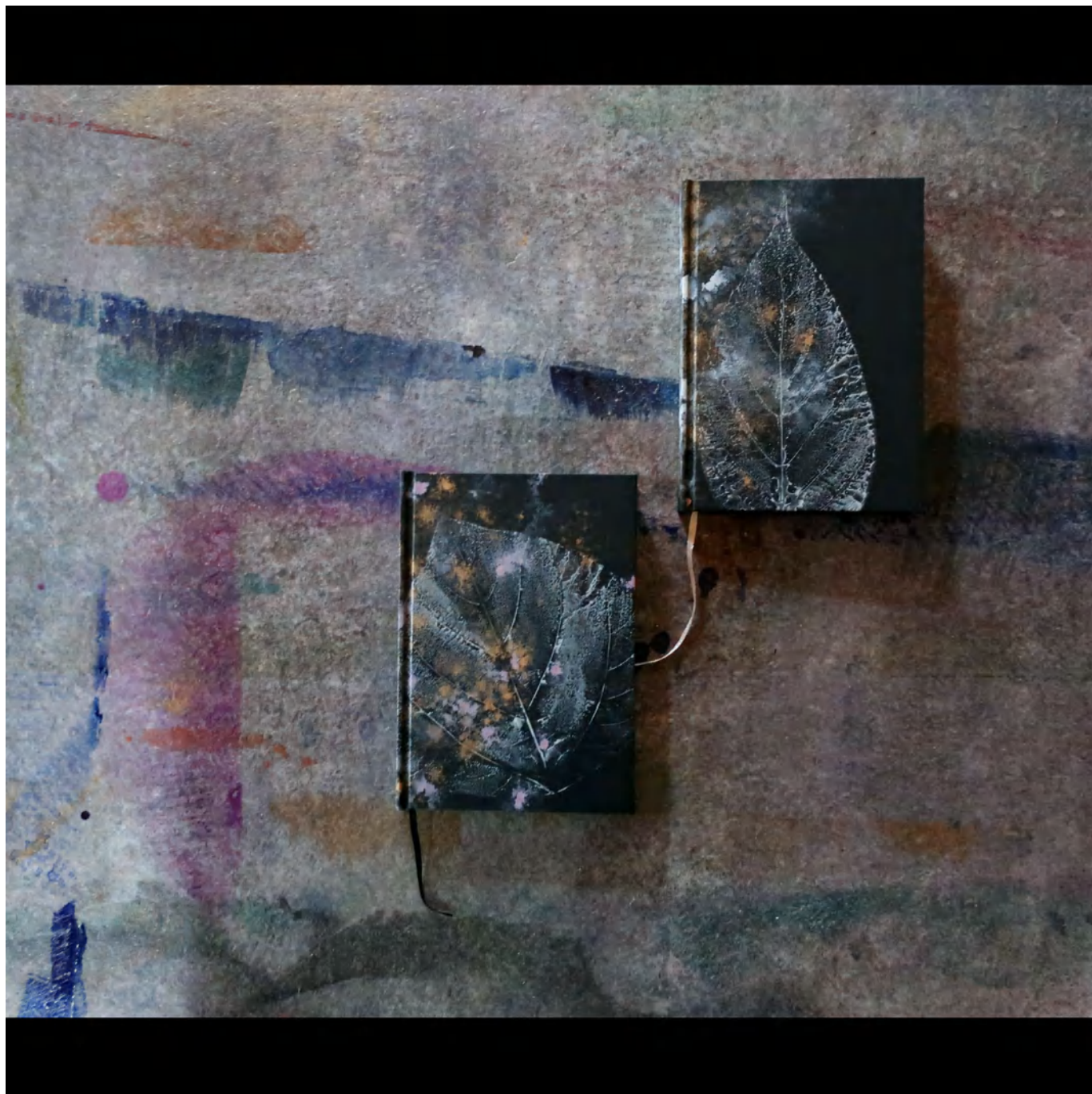


手製本ノート、紙こもの すずめや 四方佳奈（よもかな）

手製本でノートを作ってそれを糧に生きています。
今年の6月に16年間住んだ京都を離れ、雫石町に移住してきました。



ちいさな路地のちいさなうちの密集した場所から、
見渡す限り山と自然の、赤い屋根の大きなおうちに引っ越してきました。
ふだんはおうちにこもって制作し、都会へ行商にいらしています。



家族は夫と猫のマリ

クサガメのかめきち



雫石にきてから迎えた
仔猫のミリ

・なぜ移住しようと思ったか

個人的な理由やタイミングもいろいろ重なりはしましたが、
コロナ禍によるパーソナルスペースの変化は理由の一つです。

みっちりコミュニケーションの詰まった生活にくたびれてしまった。

京都の家はちいさな路地に家が並んでおり、
わたしも含め自宅兼店舗にしている人も多かったので、
つねに人の気配がある場所だった。

でもコロナ禍で距離の感覚が変わって、それが辛くなってしまった。
人との距離を取りましょう、わたしにはそのほうが楽なんだと気づいてしまった。

隣で誰かが暮らしている、すぐそばに誰かの生活があって干渉しあう、
それがふつうの社会生活と呑み込んでいたけど、
そうしなくてもある程度世界はまわっていくのだともわかった。



どこか広いところに逃げだしたくなった。

それで、敬愛する作家が理想郷として掲げていた土地のことを思い出しました。

イーハトーヴのすきとおった風、

あのひとが愛している場所ならきっとなにもかも大丈夫になるはずだと思いました。

岩手に行こう、理想郷へ行こう。

・雫石町を選んだ理由

美しい場所だから。



岩手県に限定して探しはじめて、
ある程度の目星をつけたところで実際に土地に足を踏み入れました。
仕事の合間を縫ってきたため、時間は全然なかった。
免許もなかったので移動もたいへん。
花巻、盛岡、遠野と駆けずり回るように見て周り、
雫石はノーマークでした。
たまたま京都の大家さんのお知り合いが滝沢に住まわっていて、
連れてきてくれた雫石の風景に理想郷をみたのでした。

それからなんだか隙間を縫い縫いやってきました。
雪も体感しないと、と1月にも来ました。
寒いし転ぶし快適では決してないということはよくわかったけれど、
でもそれを補って余りある美しさがここにはありました。



- 2021.11 はじめて岩手に来て雫石町に住むぞと決める。
- 2022.1 物件探しに訪町。
- 2022.4 おうちの内覧のためパートナーと岩手へ。
- 2022.5 おうちの契約等のため雫石へ。
- 2022.6 引っ越し。



箇条書きにするととんとん拍子に見えますが
割と波乱万丈でした。

・移住するまでのいろいろ

まず雫石町にきめたことがそもそも予定外でした。
パートナーは当時農業従事者で、仕事の休みが取れないため、
時間に融通をきかせられるわたしが移住の諸々をこなすことになりました。
かといってわたしも仕事を休めるほどお金に余裕もありませんので、
とにかくずーっとごたごたしていた気がします。



パンデミックのさなかですから、行けるタイミングが合わないこともありました。
家もぜんぜん決まらなかったしやきもきが続きました。
でも移住コーディネーターさんがいまのおうちを見つけてくれて、
ぶじ契約までこぎつけるまでは、
Googleマップでじっとそこを眺めるという日々でした。

どうにかパートナーが休みをもぎとることができた4月の訪町、
おうちを何軒かみせていただく段取りを組み飛行機に乗り込み、
いざゆかんといわて花巻空港からレンタカーで盛岡の宿泊先に向かう途中に、
バンパー大破のもらい事故に遭いました。
ちなみに空港近くの賢治さんのお墓にお参りをした直後だったので
パートナーは今でも賢治のせいだと言っています。



人生初の救急搬送が遠く離れた岩手県、
ふたりとも打撲ですみ命に別状はありませんでしたが、
歩くのがやっとの状態でした。
次の日は保険会社やレンタカー会社や警察への連絡でつぶれ、
ふたりでの初旅行を楽しみましょうという場合ではなくなりました。

ヨボヨボ歩きながらおうちをいくつかみせていただき、
いまのおうちにその場で決めてしまいました。
理想的な赤い屋根の大きなおうち。
たいへんだったけれどよかったね、ですむかと思いきやまだでした。



またもや救急搬送です。
こんどはわたしが食あたりになりました。
きのう屋台で買ったお惣菜ののこりを朝ごはんを食べたら、
あっという間に呼吸もできないほど上から下から大洪水、
これほんとうにだめなやつだと朦朧とした意識の底で感じました。
岩手から帰れないんじゃないかと思いました。

いちおう病院から日帰りにはできたものの、
さんざんな目に遭いました。
良き友人が、
"きっとこれから岩手ではいいことしかないから、
神さまがはじめのうちに災難ぶつけようとしたんだよ"
と慰めてくれて、そう思うことにしました。



おうちは貸し家になるなんて思ってなかった空き家だったので、
大家さんにはたいへん急な話で御手数をおかけしました。
たくさんの荷物がそのままになっていて、
ゴミ捨てや掃除の手間はたいへんなものであったはずです。
集落のみなさんのお手もお借りしたとのことです。

猫のマリは鼻ぺちゃ族、
鼻ぺちゃ族は気圧の変化に弱いため飛行機に乗れません。
京都岩手間、1000キロの道のりを陸路で行くことになりました。
岩手に住むために免許を取りましたが、
弩級の初心者のわたしには運転は不可能でした。
パートナーはひとりで1000キロを運転しました。
夕方に出て次の日の朝につきました。



おうちにたどり着きましたがすぐにゆっくりできる状態ではありませんでした。

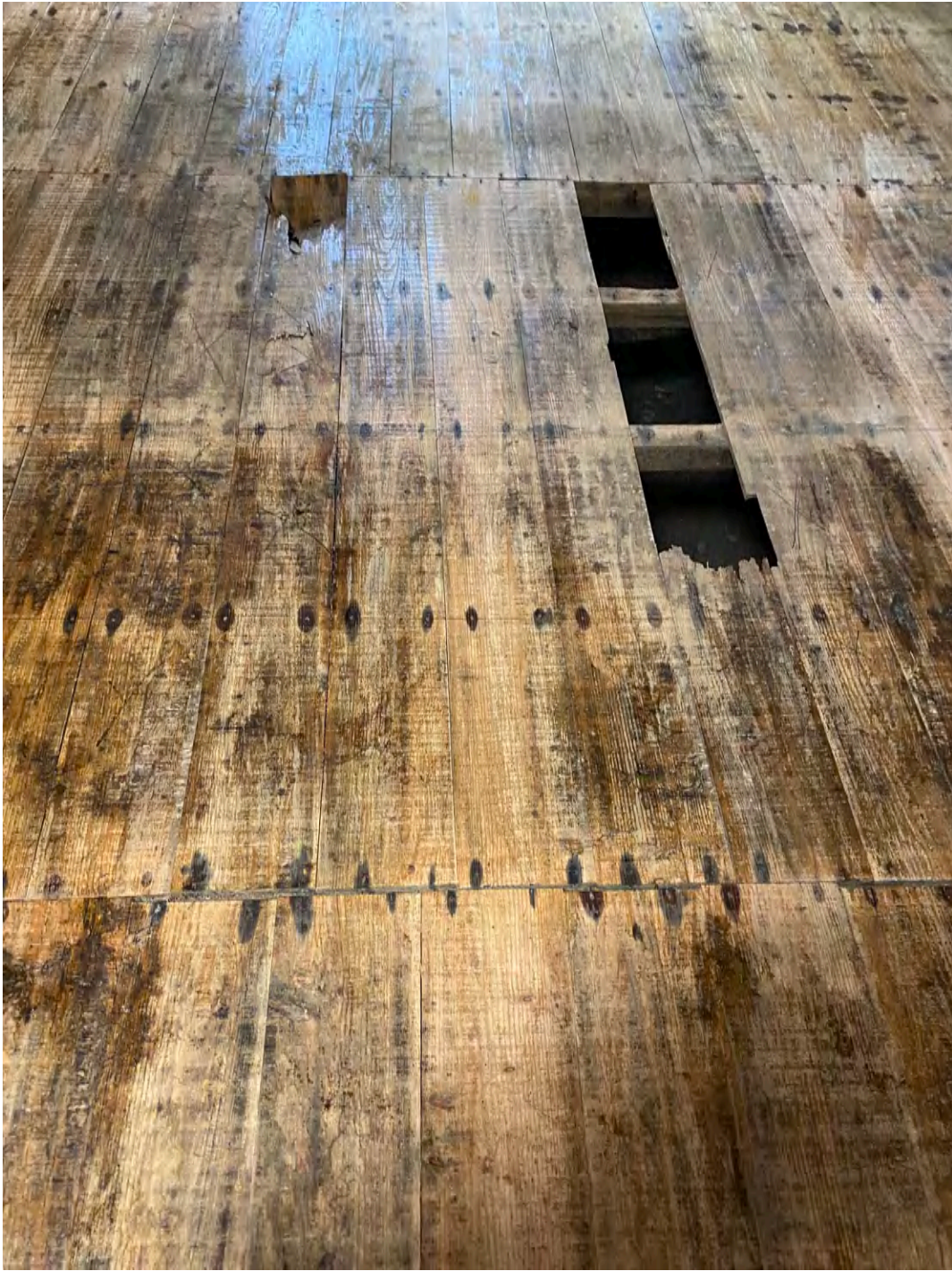
まずライフラインの確認、

とにかく掃除、床が抜けていたり給湯器がお釈迦だったり

便器から水が漏れ出したりで三週間はばたつきました。

2年ほど空き家になっていたうちに、ずいぶん痛んでしまったそうです。

謎の虫刺されも続きました。





あんまりたいへんな日々のスタートです。
大きいおうちは掃除しても掃除してもやるべきことがたくさんあるし、
一週間くらいは冷蔵庫も洗濯機もなかったのもで暮らすことで精一杯でした。
くたびれ果てて意識を失うようにして眠る日々、
でも山は美しく空は広く空気は澄んでいたのもでぜんぶ最高でした。
いまもずっと最高です。



移住先はうちを含めて7軒程度の集落、
おとなりとは2キロほど離れているでしょうか。
パーソナルスペースはぐんと広がりました。

隣人は大勢の虫たち。
移住して一ヶ月もたたないうちに集落の皆様が歓迎会として
みんなで集まって焼肉の会をひらいてくれました。
食べたことないもの、はちきれるほどたくさん頂戴して、
お土産も抱え切れないほどいただきました。



いまだにぴんどこないけれど、
集落に若い人間が来るというのはとても喜ばれることで、
集落で集まって食事会をしたのははじめてのことだとか。
尋常でない人見知りのパートナーもこれですこし安心できたようです。
夏のあいだは野菜がたくさん取れるとお裾分けを頂戴しました。
イノシシにジャガイモ畑が見つかってしまったからいそいで全部掘った！
と土から出たばかりのジャガイモを一抱えもいただいたりしました。

岩手のひとはお花が好きです。
街中の大きな河のそばにもプランターでさかりの花があり、
雫石では多くのおうちにくっついている畑にも、
野菜のほかにお花を植えている一角があります。
京都では片隅にあるだけだったスーパーの切り花売り場も、
ずいぶん広い面積を占めているように思われます。
道路沿いにも、ゴミの集積所にも、
そこらじゅうで可愛らしく花が咲いています。



おうちの前庭では大輪の芍薬が咲きました。
これを植えた大家さんのことを考えるとほんとうに暖かい気持ちになります。

こちらに来て、街中ではずいぶん見えない我慢がたくさんあったなと感じます。

"自然の中であって人は孤独を感じる事はないが、
人ゴミと喧噪の中であって人は孤独を感じる"

とは赤毛のアンの著者、モンゴメリの言葉ですが、これに共感を覚える人は
きっと雫石に来たほうが良い。



もちろん都会じゃないと寂しくて生きていけないという人もいます。

それはそれぞれ、

でももしも街中の孤独に覚えがあるのなら、
それに傷ついているようだったら、踏み出したほうが良いはずです。

いちど生活を振り返ってみてください。

ここは自然の美しさで涙のにじむような場所です。

人びとは純朴であたたかいです。

外に出るのに武装をしなくたっていい。

これから厳しい冬がやってきます。

我が家は全員雪国初心者。

どんなにたいへんだか、想像しかできません。
けれど来たときみたいに想像よりもたいへんなだろうし、
それでもまあ、どうにかなるのはわかりました。



これからの目標はとにかく冬を越すこと、
定住できるようにがんばること。

とにかく雫石町がすっかり気に入っております。
などというにはまだまだぜんぜんまわりきれていないし、
大体家の中にいますけれども、
定住を叶えるためにとにかく仕事をがんばります。
引っ越しでお財布は空っぽです。
街中に住んでいたならそれは恐ろしいことだっただろうけど、
山や草木や虫たちの様子をみていたら、
まあどうにかなるかあと気楽に思えるようになりました。
ここが健やかであるのは気持ちの良いことです。



日本の土地の、7割の場所では天の川が見えないとのこと。
雫石の晴れた夜空を見上げると、
うすぼんやりとあのミルクをながしたあとを確認することができます。
一等星がどれだかわからないほどみんな光っています。



水も澄み切っている。



毎日お山の美しさに感心しながら机に向かって制作をしています。
ここでできたものをもって、大都会に行って、
こことはちがう目まぐるしさに翻弄され、
そして山の中に帰ってくる。



この仕事が好きで、だいたい起きている間は手を動かしています。
いつか体が動かなくなって
仕事ができなくなったあとの人生を恐れていたけれど、
でもここで生き続けられるならそれはそんなに恐ろしいことじゃなさそうだ。

これは我が家に帰る道、
この世で最も美しい道です。



おわり